

# NEWS LETTER

## 近現代東北アジア地域史研究会®

第26号  
(No.26)

ISSN1345-1596

Dec. 2014



# 向野堅一『明治二十七八年戦役餘聞戦役夜話』再考

—「旅順事件」検討の前提として—

向野 康江

## はじめに

本稿は、所謂「旅順虐殺事件」（以下、「旅順事件」と略）研究における主要史料として使用されている向野堅一（1868-1931）の遺族により編纂刊行された『明治二十七八年戦役餘聞戦役夜話』（1932年刊。以下、『夜話』と略）の内容の再検討を通じて、同事件研究における『夜話』が持つ史料的位置付けを再考することを課題とするものである。

「旅順事件」とは<sup>(1)</sup>、日清戦争における土城子の戦闘（1894年11月18日）の後、同戦闘で戦死した日本兵に陵辱が加えられていたのを見て激昂した日本軍が旅順総攻撃において無辜の清側現地住民を虐殺したとされ、その被害者数は被害者が葬られた『万忠墓』で「一万八百余名」と刻まれている事件である<sup>(2)</sup>。

以上は、従来の研究成果<sup>(3)</sup>に依拠した「旅順事件」に関する通説的理解と見なしてよいと考えられるが、それらの研究の多くが依拠した史料が、本稿で取り上げる『夜話』に含まれる「三崎山の追想」（同追想の『夜話』内における書誌的位置付けは後述）であった。しかし、従来の研究では、『夜話』における「三崎山の追想」内の記述内容それ自体が事実として取り上げられる一方で、『夜話』の他の記述との整合性等に関する検討は十分行われてこなかった。別言すれば、『夜話』に関する史料批判は不十分だったのである。そこで、本稿では、『夜話』の記述内容全体を再検討することで、冒頭で述べた課題に関する追究を行っていくこととしたい。

## 1. 『夜話』における「旅順事件」関係情報の確認

本節では、向野堅一の略歴、『夜話』の書誌的情報、『夜話』における「旅順事件」関係情報を確認し、次節における検討の前提を確保しておきたい。

### （1）向野堅一の経歴<sup>(4)</sup>

向野堅一は、1868年9月4日に福岡県鞍手郡新入村（直方市上新入）で誕生。修猷館中学を卒業目前で病気退学した後、89年12月、福岡で荒尾精の演説を聴いて感銘を受け、清国に渡って商人になろうと決意。90年9月に上海に創設された日清貿易研究所を受験し合格。93年6月に卒業し、日清商品陳列所で実地商業研究に従事。94年の日清戦争では、民間人として特別任務すなわち軍事探偵として遼東半島花園口に上陸し、堅一のみが唯一人生還した。堅一は、この時の活動を日記形式で書き残しており、これが後述する『夜話』の底本とも言うべき『向野堅一從軍日記』（以下、「堅一日記」と呼ばれるものである。

日清戦争後、1896年に日清貿易研究所卒業生である香月梅外、河北純三郎とともに東交民巷に筑紫洋行を創立するものの、1900年の義和団事変で焼き討ちに遭い、同行を失い、有馬組勤務を経て、有益公司を設立して遼西地域の輸送路開拓に乗り出す。その後、白岩龍平の大東汽船に出資、石炭販売、陸軍用品払い下げ販売業に従事する一方で、ガラス工場を開き、瀋陽建物株式会社、日支合弁正隆銀行、瀋陽化学工業株式会社を設立。さらには石油販売業も手がけ、満洲市場株式会社、奉天製氷株式会社の監査にも就任し、茂林洋行の社主となる。また、奉天商工会議所副会頭を6年間務め、奉天聯合町内会長にもなるなど、現地日本人社会にも重きをなす。1931年8月、関東軍による満洲事変を事前に知る立場にあった堅一は、事変勃発後の対応を図るべく上京、翌9月に過労のため脳卒中（脳血栓）で倒れ、駿河台杏雲堂病院に入院。親友や知人に見守られ、満州事変勃発の前日である9月17日午後7時10分に永眠した。

### (2)『夜話』の書誌情報

『夜話』は、以下に述べるように、「堅一日記」を中心として編纂されたものである。「堅一日記」は、向野堅一自身が従軍時に黒皮の手帳に、びっしりと毛筆書きにて書き記した日記形式（軍事探偵活動中の10月24日から11月3日の部分に関しては、当該月日の記憶をもとに後日記述したものとなっており、「日記形式」とする所以でもある）のもので、現物は現在所在不明となっている。『夜話』は、この「堅一日記」を遺族が手分けして堅一の一周忌に間に合うように印刷・刊行したものである。同書には、「昭和七年九月上旬一周忌ヲ迎フルニ当リ漸ク写終ル 向野一家」と記されていることから1932年に刊行されたものと推察でき、「向野堅一従軍日記 其ノ一」（1894年10月16日 - 同年11月30日、40丁）、「向野堅一従軍日記 其ノ二」（1894年12月1日 - 95年7月16日、52丁）、「向野堅一遺稿及特別任務志士餘聞」（頁数ナシ）から構成されている<sup>(5)</sup>。この『夜話』は、管見の限りであるが、愛知大学図書館、北九州市立中央図書館、向野堅一記念館（<http://mk2012.main.jp/kinen/>）、中国の大連市図書館での所蔵が確認できる。なお、『夜話』との重複内容を持つ史料として、堅一の長男・向野晋（1899-1984）により1967年にガリ版刷りで刊行された『明治二十七八年戦役向野堅一従軍日記』（私家版・非売品、総144頁）がある。同書は、敗戦前後の混乱の中で堅一の遺族が保管していた「堅一日記」と『夜話』が所在不明となったことを悔いた向野晋が<sup>(6)</sup>、改めて『夜話』を原本として再編集したもので、その過程で新たな加筆・訂正がなされていることが、『夜話』との対照から確認できる<sup>(7)</sup>。

### (3)『夜話』における「旅順事件」関係記述内容の確認

『夜話』における「旅順事件」に関する記述の史料的中核部分は、「旅順事件」研究の代表的成果である井上春樹『旅順虐殺事件』（筑摩書房、1995年。以下、「井上前掲書」）で以下の文脈の中で引用された向野堅一の発言部分となる<sup>(8)</sup>。

『明治二十七八年戦役餘聞戰役夜話』には、先に触れた「向野堅一從軍日記」の他に、「満州及日本」（一九三〇年一月号）掲載の「日清戰役の追憶」と、一九二四（大正十三）年九月二十三日（秋の彼岸中日）に金州民政署で語った「三崎山の追想」が収められている<sup>⑯</sup>。山地の命令に関する該当部分は、「三崎山の追想」のなかにある。三崎山というのは、向野の同僚で通訳官であり軍事探偵であった山崎、藤崎、鐘崎、の三名が清国軍にとって慘殺され、彼らの墓地となった山の名で、彼ら三人の姓に因んで名付けられたものであった。向野が當時追想をしたその日は三崎山三十年大祭の日であった。日清戦争から三十年といえば、まだ軍や関係機関の在命者が十分にいると頃のことであり、公的な場でなされた発言であることを考えあわせると、発言の内容は信憑性が高いように思われる。なによりも、山地にいちばん近いところにいた、第一師団司令部付き通訳官向野の言である。

よだん りょじゅん やまじ しょうぐん ひせんとういん とう  
 余談ニナリマスガ旅順デ山路（山地の諏記・以下同）將軍ガ非戰鬪員ヲモ捕へ  
 ざんさつ い とうじしんぶん だいぶ やかましく  
 テ惨殺シタト云フコトガ當時新聞デ大分八ヶ間敷ナツタコトガアリマシタガ  
 これ りょじゅんせん はつめ が きへいせつこうたいやくにじゅうめい りょじゅん つどじょうし とら たいちょう  
 是レハ<sub>①</sub>旅順戰ノ初メ我力骑兵斥候隊約二十名ガ旅順ノ土城子デ捕エラレ隊長  
 ちゅうまん ちゅううい はつ ひくへいし みなしうきゆう き おと か そ きずくら  
 中萬（名は徳次）中尉ヲ初メ各兵士ハ皆首級ヲ切り落サレ且ツ其ノ瘡口カラ  
 いい い ある こうがん せつだん イ じつ げんご ぜう さんさつ じょう  
 石ヲ入レ或ハ率丸ヲ切断シタルモノモアルト云フ實ニ言語ニ絶スル慘殺ノ状ヲ  
 もくげき やまじゅううくん おお いか かく ごと ひじんどう あへ おこな こくみん ふじょうろうよう  
 且擊セラレタ山路將軍ハ大イニ怒リ此ノ如キ非人道ヲ敢テ行フ国民ハ婦女老幼  
 のぞ ほかせんぶせんじょ い めいれい くだり りょじゅん じつ さんまたさん りょじゅん  
 ヲ除ク外全部剪除セヨト云フ命令ガ下リマシテ<sub>②</sub>旅順デハ實ニ慘又慘、旅順  
 かうないあたか けつ が かん いた  
 港内恰モ血河ノ感ヲ致シマシタ。

（井上前掲書 295-296 頁。下線部は筆者、脚注およびルビは井上自身による）

従来の「旅順事件」研究の多くは、以上の「三崎山の追想」からの引用部分（以下、上述の引用箇所を「余談」と略）を前提に「旅順事件」の再構成を進めているが、「余談」での発言内容は、井上が指摘するように「十分信頼できる」ものなのであろうか。次節では、「余談」の内容を『夜話』の「向野堅一從軍日記 其ノ一」と「向野堅一從軍日記 其ノ二」（以下、「從軍日記」と総称）の記述に照らしつつ検討してみることしたいが、まず本節では、「余談」の内容に関連する「從軍日記」の記述である「余談」にある土城子での戦闘当日と翌日の記録を以下に掲げておきたい。なお、引用にあたって、スペースは筆者が読みやすさを勘案して設定しており、下線は筆者が引いたものである。

（イ）十一月十八日 曇天 午前七時三十里堡ヲ発シ騎シテ司令部ニ伴テ進ム 時雨降來リ余外套ナク雨ヲ侵シテ從フ 須臾ニシテ雨止ム 余ノ騎シタル馬青ニシテ小ナリト雖ドモ元氣好ク勇ミ勇ミテ馳セントス 余原来（元来）馬術ニ暗クシテ唯ダ馬ニ乗セラレ居ルノミナレハ馬ヲ自由ニ禦御スルコトハ以テノ外ノ事ナリ 而シテ司令部将校ノ後ニ從ヒ行クコトナレハ時々伝騎ノ馬ヲ蹴ルコトアリ 気ノ毒ナルコト幾回ナルヲ知ラス 新山副官ハ伝騎ニ命ジテ余ノ馬ト換

へ乗セシム 少焉ニシテ馬少シク労レ余ノ馬ニ乗ル 午後一時營城子ニ着ス  
時ニ聞ク 本日早朝騎兵三中隊ヲ發シ敵兵搜索ヲナサシム 前日ヨリ敵兵少々  
見ハレ居リシモ又例ノ弱武者問フニ足ラストテ双台溝ノ山間迄進ムヤ敵兵両側  
ヨリ挿ンテ之レヲ要擊ス 遂ニ退ク不能 此力為メ其ノ騎兵隊ノ押ヘトシテ第  
三聯隊第一大隊ノ第三中隊及第四中隊ヲ貸ス 此時騎兵退クニ道ナシ 是カ為  
第三聯隊ノ兵ハ双台溝ノ山上ニ背囊ヲ卸下シ騎兵ノ援護ニ赴ク 敵兵大数之レ  
ヲ囲ム 進退大ニ困マリタリ 此ヲ見ルヤ朝川騎兵大尉ハ二十四騎ヲ率ヒ襲撃  
シタリ 此時我ガ友人米津佐太郎君ハ其ノ二十四名ノ一人ニシテ日本刀ヲ携帶  
セリ 他ノ騎兵ハ村田刀ナリシヲ以テ思フ併ニ斬ル能ハザルモ 米津氏ノ刀ハ  
一触一擊敵兵ヲ斃サザルナシト 騎兵ハ通訳官ノ刀ヲ羨ミト云フ 此ノ襲撃  
アルヤ敵兵少シク躊躇ノ色アリ 其際ヲ得テ第三聯隊第四中隊ノ兵ハ退キタリ  
其間急激ナルヲ以テ背囊ヲ取ル間ナク遂ニ敵兵ノ奪去スル所トナレリ 此ノ  
衝突ヲ聞クヤ我師團ノ先頭第三聯隊第二個大隊援護ニ赴ク 道中水ヲ求ムル遑  
ナク側ラ人有リテ衣服ニ水ヲ注ギ左ナガラ火事場ノ如クナリ 兵ハ走リツツ衣  
ノ水ヲ吸フテ行ク 此時敵兵退クノ状アリ 敵兵少焉ニシテ支フル能ハズ退却  
セリト 此日ノ死傷四十八名ナリ 此夜營城子ニ宿ス 師團長參謀長ハ朝川大  
尉ヲ見舞ハレタリ 内ニ兵卒ノ負傷シタル者非常ノ元氣ナル者アリ 実ニ感服  
セリ

(ロ)十一月十九日 晴天 午前五時半ニ起床シ營城子ヲ發ス 双台溝ノ丘陵ヲ上  
ラントスルヤ途中ニテ死体三人ヲ担荷ニ載セテ病院ニ送ルヲ見ル 内二人ハ首  
ナク之ヲ見シモノ落涙セザルナシ 此ノ死体ハ實ニ我兵士ヲシテ大ニ敵愾心ヲ  
増サシメタリ 此ノ丘上ニ止マルコト一時半余ニシテ進ム 此時米津中原氏ニ  
遇フ 徐家窟ニ至リ昼飯ヲ吃ス時ニ町ヲ隔テテ民家ノ側ラニ日本兵ノ死体ヲ發  
見ス 之レヲ檢スルニ首ト手ト陰囊ヲ取り去リ肌肉ヲ裂キ腹ヲ斬リ臓腑ヲ引キ  
出シタリ 士官之ヲ見テ兵士ニ命シテ曰ク能ク此ノ死体ヲ見置ケ敵兵ヲ見ハ  
一人ヲ餘ス勿レト云フ 兵士涙ヲ振フテ切歯シテ去ル 此ノ民家ニ二人ノ土民ア  
リ 手腹ニ血痕アリシヲ兵ニ見出サレ遂ニ之レヲ打チ殺ス 鮮血淋々庭中ニ溢  
レ血煙リ立チ居ル所ニ余モ駆セ附ケタリ 之レヲ見テ余モ少シハ癪モ下ガリシ  
如シ 此兵ハ第三聯隊ノ兵ナルカ 師團長閣下モ之レヲ一見セラレ大ニ残念ガ  
ラレ今後ハ已ムヲ得ズト云ハレシトゾ 蔣家屯マニア行ク途中馬ノ斃レタルア  
リ足モ尾モ臀肉迄削リ落セリ 畜生乍ラモ実ニ憐レナル心ヲ起セリ 支那人三  
人ヲ道案内者トナス 堀氏之ヲ伴フテ司令部ノ在ル処ニ至ラントスル途中ニ  
テ一人逃走シタリ 堀氏ハ余ニ先チ石嘴子迄テ先發ス 夜ニ入り帰ル 雨少シ  
ク下ル 米河子ノ西南端ノ河原ニ一度集合シ米河子ニ歸リ此夜此處ニ宿ス 舍  
營ニ附クヤ室内ニ包米餅アリ衛兵ト之レヲ食フ

## 2. 「従軍日記」からみた「余談」の問題点

### (1) 「余談」と「従軍日記」の差違

「余談」下線部①に対応する「従軍日記」の箇所は前節の（イ）と（ロ）であるが、両者を対照して直ぐに気づくのは、「余談」下線部①に関して直接対応する記述に欠落がある点である。前節（イ）を見る限り、土城子での戦闘当日における向野堅一が凄惨な戦死日本兵の状況や師団長（山地元治中将）の「婦女老幼ヲ除ク外全部剪除セヨト云フ命令」に接したことは確認できない。当日の記録は戦闘の様子と日本側死傷者数および師団長が戦傷者を見舞ったことが記されているだけである。凄惨な戦死日本兵の状況を目撃したのは、土城子での戦闘翌日の記録である前節（ロ）で確認できるが、ここでも、「余談」で述べられているような、その凄惨な状況をみて激昂した山地が「婦女老幼ヲ除ク外全部剪除セヨト云フ命令」したとする文脈と異なる記録が残されている。前節（ロ）からは、向野堅一を含む日本兵の清兵に対する敵愾心の激昂ぶりが確認できるが、「余談」下線部①にある山地の「大イニ怒リ」という状況は確認できないし、山地が「大ニ残念ガラレ今後ハ已ムヲ得ズト云ハレシ」（前掲（ロ）下線部）と述べているのは日本兵による「土民」殺害現場を見てであって、日本兵の戦死者の凄惨状況を見てではない。また、「婦女老幼ヲ除ク外全部剪除セヨト云フ命令」それ自体の記載は存在しない（その後の「堅一日記」の記録と『夜話』に含まれる他史料にも記載は無い）。前節（イ）（ロ）からは、「旅順事件」に関する先行研究の多くで旅順での日本軍による「虐殺」の起因の論拠として使用されている「余談」下線部①に直接的に対応する記述は確認できないのである。

次に、日本軍による旅順攻略状況を記した「余談」下線部②に関してだが、「従軍日記」には日本軍による旅順攻撃が実行された11月21日と翌22日の記述が存在していない<sup>(10)</sup>。このことは、「余談」下線部②の向野堅一の発言は、「三崎山の追憶」を語った段階で堅一が自らの記憶もしくは伝聞を述べたことを意味するものといえる。向野堅一自身の記憶という点では、事件の現場を堅一が如何なる形で目撃したかが記憶の内実を問う上で重要な検討ポイントとなるが、「堅一日記」が散逸している現状では、この点を向野堅一自身の一次的史料から直接的に検証する術を誠に遺憾ながら筆者は持っていない。そこで、以下では、向野堅一が、「余談」下線部②を見聞きし得るとしたら、それはどのような状況だったのかを、向野堅一とは別の人物が残した記録から追究してみることとしたい。

## （2）亀井茲明『従軍日乗』からみた「余談」の位置付け

1894年11月21・22日の向野堅一に極めて近い位置にいたと推察される人物に堅一と同じ第二軍の司令部付きだった亀井茲明（1861-1896）がいる<sup>(11)</sup>。亀井は、向野堅一と同じ横浜丸で94年10月16日に宇品港を出て同月24日に花園口に上陸し、従軍中は同宿するなど、向野堅一と行動を共にすることが多かった人物である。亀井は、従軍の記録を『従軍日乗』（私家版、1899年刊）として残しており、同書は『日清戦争従軍写真帖—伯爵亀井茲明の日記—』（柏書房、1992年）に採録されている。『従軍日乗』（以下、「日乗」と略）には、「堅一日記」で空白となっている11月21・22日の記録が残されており、以下この「日乗」から、11月21・22日に向野堅一が何処に

いて、旅順の状況を如何に目撃することができたのかを検討することとしたい<sup>(12)</sup>。

「日乗」にある、11月21・22日における向野堅一の所在地を想定させる記述は、以下の通りとなっている。なお、括弧内の頁数は筆者による註記で前掲『日清戦争従軍写真帖—伯爵亀井茲明の日記—』の頁数である。

(イ) 十一月廿一日晴 余ハ前夜十時舍營ニ歸リ明日旅順總攻擊ノ計畫ヲ聞ケバ此ノ夜十二時諸兵米河子ヨリ南方一里許石嘴子ニ集合シ同所ヨリ各方面ニ相分レテ進軍スト 是ニ於テ一睡ヲモ爲スコト能ハズ（中略）此ノ夜石嘴子ノ集合地ニ至レハ我軍ハ已ニ進軍シテ隻影ヲモ止メズ是ニ於テ皆其ノ期ヲ失ハシコトヲ恐レ路ヲ南方ニ取り（中略）渤海灣ニ面スル岸上ニテ歩兵第一聯隊ノ夜營地ト爲ス因テ之ニ就キテ師團司令部ノ所在ヲ尋ヌレトモ知ル者ナシ（中略）時ニ傳令騎兵ノ門外ヲ通過スル者アリ天野氏之ヲ呼ビ留メテ司令部ノ所在ヲ尋問ス騎兵指示スルニ彼ノ高砲臺乃チ椅子山砲臺ヲ以テ斯ニ始メテ司令部ノ所在ヲ得余等一同皆顔面喜色ヲ呈セリ（中略）椅子山ノ山趾ニ至リ更ニ一鞭ヲ加ヘテ山ニ上ル此ノ報臺ハ元來陸方面ノ防禦ニ備ヘタルモノナレバ最モ劍峻ニシテ秀壁ナリト爲ス馬足ニ任セテ山腹ヲ攀ヂ難キヲ以テ已ムヲ得ス各馬ヲ下リテ徒步シ臺上ニ至ル臺上ハ甚タ爽壇ニシテ四面ノ諸砲臺皆一眸ノ下ニ在リ臺門ヲ入レハ山地師團長大寺參謀長等皆在リ（中略）是ニ於テ師團長ハ此ノ日砲兵援後ノ任ヲ以テ後方ニ在リシ歩兵第二聯隊ニ命シテ特ニ此ノ攻撃ニ當ラシム第二聯隊ハ其命ヲ受クルヤ直ニ猛進突撃先ツ旅順市街ニ潜伏セル敵兵ヲ屠ル是ヨリ先清將旅順附近ノ店民ニ諭シ十五歳以上ノ男子ハ皆我軍ニ抵抗セシム故ニ民家毎戸多少ノ兵器弾薬ヲ蓄ヘサルモノナシ是ニ於テ苟モ我軍ニ抗スル者ハ悉ク戮殺シテ遺スコトナシ第二聯隊第八中隊ノ人員渾テ二百三十三人中敵兵十五人以上ヲ斬殺セシ者十八名三十人以上ヲ斬殺セシ者二人アリキトソ又第三聯隊ノ宿衛地ニ於テモ七百人餘ヲ斬殺セシト云以テ其ノ戮殺ノ多キヲ知ルヘシ（151-164頁）

(ロ) 十一月二十二日晴（中略）山地第一師團長ハ毅軍操練場ヲ集合所ト爲シ午前第七時ヲ以テ諸兵ヲ曾シ各部署ヲ定メ此所ニ於テ午餐ヲ喫シ午後師團長ハ馬ヲ旅順市街ニ進メラル余ハ宮崎幸麿一人ヲ宿舍ニ遣シ置キ師團長ノ後ニ從フ（中略）余ハ此ノ日先ツ集合地ナル練兵場ニ至リ其レヨリ隈元憲兵中尉ト共ニ旅順市街ニ入ル途中ニ於テ中尉一兵營ニ入ラントス敗兵其ノ家ニ在リ突然銃ヲ發シテ抵抗ス中尉奮然闖入シテ之ヲ戮殺シ所在ノ羊皮外套六襲ヲ取り防寒用トシテ之ヲ余ニ贈ラレタリ余ハ市街戰後ノ慘状ヲ歴覧スルニ旅順ノ市街ハ南方ニ向テ三條ノ新街アリ其ノ街頭ニ榜シテ東新街、中新街、西新街ト曰フ市街ノ家屋ハ凡ソ二千戸アリ住民皆亡失シテ空虚トナリ壁破レ字壞レテ甚タ荒涼ノ状ナリ路上ニハ伏屍堆ク流血川ヲ爲シ兩側ノ民家櫻櫻或ハ陶磁器ノ破片紙屑支那靴等散亂シテ狼藉タリ屋内ニモ亦伏屍アリ鮮血淋漓足蹈ム所ヲ知ラス細ニ其ノ屍ヲ檢スレバ或ハ頭脳ヲ中斷シテ脳漿ヲ出タシタルモノアリ或ハ腹部腰部等ヲ切

断セラレテ腸胃ヲ露出セルモノアリ其ノ状惨澹怨鬼啾々ノ聲ヲ放ツガ如キヲ覺ニ眞ニ酸鼻ノ極ト爲ス軍司令部ニハ奮道臺衙門ヲ充テ師團司令部ハ大德堂ト稱スル藥舗ヲ以テ之ニ充ツ（177-189 頁）

本節（イ）から確認できるのは、亀井が帯同していた部隊が所在を確認できずにいた師団司令部は椅子山に駐屯していたこと、山地の命令で旅順口市街攻撃がおこなわれ、非戦闘員を含めて抵抗の可能性が想起される対象に対する激しい掃討がおこなわれ「戮殺ノ多キヲ知ル」の状況を呈するに至ったことなどとなっている。ここで、「余談」下線部②との関係から留意すべきは、亀井にせよ向野堅一にせよ彼らが師団司令部所在地にいたとすれば、旅順口市街攻撃に直接参加したとは考えがたく、21日段階で「戮殺ノ多キヲ知ル」という記述は当日段階の伝聞もしくは後日の情報に拠り記載された可能性があるということである。また、本節（ロ）から確認できるのは、師団司令部の旅順口への進駐は翌22日のことであり、この段階で亀井は旅順口市街の惨状を実見しているということである。これらの点をふまえると、「余談」下線部②の向野堅一による発言は、攻撃当日の実見ではなく、その翌日の状況の記憶から発言との可能性が高いことが窺える。

では、向野堅一は、前節で述べたことも含めて、何故、自分自身の直接的な実見ではないと推察される諸事実を、実見したものと聞き手に受け取られるような形で発言しているのであろうか。最後に、この点を検討する上で必要となる課題を確認して本稿を終えることとしたい。

### おわりに—『夜話』の史料的位置付けに向けての課題—

上述してきた通り、「余談」における向野堅一の発言内容には、旅順事件当時の実見的事実とは別の、伝聞や後日において知り得た情報が含まれていると考えられる<sup>(13)</sup>。このことは、「余談」の発言内容を「旅順事件」実見者の発言として、それのみをもって「旅順事件」再構成の中核史料とすることに慎重であるべきであることを示していると考えられる。それは同時に、「旅順事件」の再構成にあたっては、改めて個々の当該関係記録に対する史料批判（史料的位置付け）を徹底的におこなう必要性を示すものであろう。この点をふまえて、以下では、後日得た情報を直接体験として押し出さなければ内包した「余談」を当該期の歴史において如何なる史料的に位置を占めるものであるのかを考察する上での課題を検討しておきたい。

まず検討されるべきことは、「三崎山の追想」が語られたく場の規定性についてである。「三崎山の追想」には、「三崎山の追想大正十三年九月二十三日三崎山三十年大祭当時於金州民政署樓上向野堅一 追想談として金州民政署河野占男氏速記稿」とあるが、この「三崎山三十年大祭」とは如何なるイベントで、そこでの「言説空間」は如何なる規定性により律せられるものだったのであろうか。それは、前掲した井上前掲書からの引用にある「日清戦争から三十年といえば、まだ軍や関係機関の在命者が十分にいること頃のことであり、公的な場でなされた発言であることを考えあわせる

と、発言の内容は信憑性が高いように思われる」ということにとどまるものだったのであろうか。「公的な場」が発言に与える規定性は、発言内容の「信憑性」を高めることだけに作用するだけでなく、「公的な場」内で固有にもつ「価値基準」が個々の「事実」の全体的構造から引き離した恣意的摘出とその再構成による歴史事実の「修正」をもたらすものであることをふまえれば、「三崎山三十年大祭」の内実についての検討は、そこでの発言内容を位置付ける上で不可欠な作業であると言えよう。具体的には、「三崎山三十年大祭」が如何なる目的で如何なる人々・組織により組織・運営されたのかを、1924年における「満洲」をめぐる政治・経済状況との相互連関性をふまえて明らかにする作業が必要であろう。この点について筆者は別稿において検討する準備を進めており、本稿では課題の指摘にとどめておきたいが、第一次世界大戦後の不況の慢性化と前年の「旅大回収運動」展開に象徴される中国ナショナリズムの台頭という1924年当時の現地状況は、現地日本人社会において「日清戦争」の歴史的意義を「中国側の非道・傍若に対する日本側の反撃の正当性」という理路の中に改めて確認することを求める「言説空間」を形成しつつあったことを指摘しておきたい。

次に、向野堅一なる人物像の再検討である。従来の研究では、日清戦争時の軍事探偵としての向野堅一に着目する一方で、「余談」を語る段階での堅一に関する検討が等閑視されてきた。前述した通り、「余談」を語る当時の向野堅一は、現地日本人社会において重きをなす経済人であり、そのような人物の発言という側面から「余談」を検討することは、史料批判としては当然であろう。このことは、前述した当該期の政治経済状況中で「余談」を位置付けるだけでなく、堅一の生涯の足跡の中で、別言すれば堅一が残した史料群全体の中で「余談」を位置付けていくことが必要であることを意味するものである<sup>(14)</sup>。とりわけ、「余談」において日清戦争後に得た情報が混在している可能性が高いことをふまえるなら、堅一が如何なる人間関係の中にあり、如何なる情報を知り得る立場にあったのかの確認は極めて重要な課題となる<sup>(15)</sup>。それは、向野堅一なる人物や彼が残した史料群を「旅順事件」という個別事実の確認という限定から解き放し、近代日中関係史あるいは近代東北アジア地域史という視角から位置付け直す作業でもあるが、本稿ではその必要性の指摘にとどめ実証的追究を後日の課題として筆を擱くこととしたい。

## 註

- (1) 旅順事件が広く知られる契機は、日清戦争期における『タイムズ』対『セントラル・ニュース』、『ジャパン・メール』、『神戸クロニクル』、『ワールド』クリールマン対『ヘラルド』特派員ガーヴィルなどの、外国新聞紙上での報道にあった。これを受けて国内でも報道された。後述する向野堅一の「當時新聞デ大分ハケ間敷ナツタコトガアリマシタガ」という発言はこの一連の報道動向を指している。なお、旅順事件の歴史研究の端緒としては、藤村道生『日清戦争—東アジア近代史の転換点』(岩波新書、1973年)をあげることができる。
- (2) 以上の内容は、一般的理解という意味でウィキペディアの記述を基礎とした (<http://ja.wikipedia.org/wiki/旅順虐殺事件>)。

(3) さしあたり、井上春樹『旅順虐殺事件』(筑摩書房、1995年)、白井久也『明治国家と日清戦争』(社会評論社、1997年)、秦郁彦「旅順虐殺事件—南京虐殺と対比しつつ—」東アジア近代史学会『日清戦争と東アジア世界の変容下巻』(ゆまに書房、1997年)、大江志乃夫『東アジア史としての日清戦争』(立風書房、1998年)、嶋名政雄『乃木「神話」と日清・日露』(論創社、2001年)、白羽祐三『日清・日露戦争と法律学』(中央大学出版部、2002年)、「大谷正」「第一章 日清戦争における日本軍の住民への加害—旅順虐殺事件から台湾植民地化戦争へ—」田中利幸(編)『戦争犯罪の構造 日本軍はなぜ民間人を殺したのか』(大月書店、2007年)、豊田泰『日清・日露戦争』(文芸社、2009年)、古川薰『斜陽に立つ—乃木希典と児玉源太郎—』(文芸春秋、2011年)などをあげておきたい。

(4) 以下の記述については、拙稿「直方に生まれたつよくやさしい日本人・向野堅一」『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学、芸術)』(茨城大学教育学部)第59号、2010年、23-35頁、を参照されたい。

(5) この内部構成は向野堅一記念館所蔵版に拠った。後述する各所蔵版には(大連市図書館所蔵版は未見)、構成に若干の異同がある。その異同がなぜ生じているのかに関しては、『夜話』の編纂過程と継承過程という書誌的に重要な課題であるが、後日を期したい。

(6)『明治二十七八年戦役向野堅一從軍日記』の冒頭にある「子孫に託ぶ」には、以下の記述がある(／は改行を示す)。

父の自筆特に毛筆書の原本たる大東亜終戦の時八路軍、ロシア兵の進駐にて危険を感じ、日中友好協会組織せらるや、父の友人にして同協会の幹部たりし染谷保蔵氏に、父の遺書及弟啓助の遺品の保管を依頼しあきらるも後染谷氏戦死として捕らえられ、病死せらるや、其等は行衛不明となり、引揚帰国後家宝まるに及び、如何にしても持ち帰るべきなりしにと、自分の不甲斐なさを嘆ずるのみ。／幸 二男 三生、予科練入隊の時持参せし複製の一書と、従兄向野睦祐氏より返還されしものにより再び複製を思い立ち子等に贈らんとす。／我が過ちを宥せ／昭和四十一年十一月一日／再び複製を思い立ちて

(7) 一例をあげると、後述する「三崎山の追憶」部分が、

余談ニナリマスガ旅順デ山路將軍ガ非戦闘員ヲモ捕ヘテ惨殺シタト云フコトガ當時新聞デ大分ヤカマシクナッタコトガアリマシタガはレハ旅順戦ノ初メ我が騎兵斥候隊約二十名ガ旅順ノ土城子デ捕エラレ隊長中尉ヲ初メ各兵士ハ皆首級ヲ切り落サレ且ツ其ノ瘡口カラ石ヲ入レハ寧モモアリ甚ダシキハ顔ノ皮ヲハギ机上ニ飾ルト云フ実ニ言語ニ絶スル惨殺ノ状ヲ目撃セラレタ山路將軍ハ大ニ怒リ此ノ如キ非人道ヲ敢テ行フ国民ハ婦女老幼ヲ徐ク全部剪除セヨト云フ命令ガ下リ、旅順デハ実ニ惨又惨、旅順港内恰モ血河ノ感ヲ致シマシタ。となっており、下線部分に差違が確認できる。このような差違、とりわけ『夜話』に無い加筆部分の情報を向野晋が如何に入手したのかは、『夜話』の史料的位置付けて検討する上で極めて重要な追究課題であるが、後日の課題としておきたい。

(8) 井上氏の成果を取り上げるのは、同氏の成果が前掲註(3)で取り上げた先行研究の多くで繰り返し利用されていることから当該研究の代表する成果と目することができるに加えて、唯一『夜話』(大連市図書館所蔵版)を閲覧・利用しており、本稿課題である歴史史料としての『夜話』の再検討に際しては好個な事例を提供するものと考えたからである。なお、「日清戦役の追憶」

のまえがきには、「昭和四年一月一日発行瀧州及日本所載」とある。加えて、「余談」内にある「中萬中尉」は向野堅一記念館所蔵版では「隊長中嚴中尉」となっている（但し、正確な表記は井上前掲書の「中萬」）。また、「余談」にある「旅順港内」は「旅順口内」の誤りと考えられる。

(9) 「日清戦役の追憶」と「三崎山の追想」は、前述した向野堅一記念館所蔵版の構成では「向野堅一遺稿及特別任務志士餘聞」に含まれている。また、同「向野堅一遺稿及特別任務志士餘聞」には、その他に「履歴書」、「大熊鵬君の足跡」が含まれている。加えて、「三崎山の追想」は、向野堅一記念館所蔵版では「三崎山の追想」となっており、本稿では直接引用以外は「三崎山」としている。なお、藤崎、山崎、鐘崎は、藤崎秀、山崎羔三郎、鐘崎三郎である。

(10) この点は、井上前掲書でも、以下の通り指摘されている。

第二軍の戦記中、最大の山場であったはずの十一月二十一日から同二十二日にかけての記述は、日付ごとない。それまで毎日欠かさず記録されていたものがないのである。また、事件を匂わせるような記述もその前後に一切ない。理由は二つ考えられる。向野自身が書かなかつたか、向野没後に遺族の手によって原本を謄写版原紙に転記する際に省略されたのか、のいずれかであろう。（井上前掲書、118頁）

(11) 亀井の経験に関しては、さしあたり、内藤正中「伯爵カメラマンの従軍日記」（後掲『日清戦争従軍写真帖—伯爵亀井茲明の日記一』所収、19-21頁）を参照されたい。

(12) 「日乗」には、亀井が日付当日だけでなく、後日諸資料に依拠しつつ加筆された部分を多数含んでいることは注意を要する（内藤正中前掲論文、21-22頁）。本来ならば、「余談」同様、「日乗」それ自体の史料批判をおこなうべきところであるが、本稿では「余ハ……」とあるように、亀井本人が体験したと記録している箇所を中心に利用して、さしあたりの次善策としておきたい。

(13) 「余談」で「従軍日記」には出てこない土城子での日本搜索騎兵隊遺体の人名を「中萬中尉」（向野堅一記念館所蔵版では「中嚴中尉」）と明言しており、これも後日得た情報での発言と推察される。

(14) この点に関して筆者は、向野堅一関係史料の整理・分析を進めており、その成果に関しては、以下の拙稿を参照されたい。

- ・「向野堅一書簡目録（一）」『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学、芸術)』（茨城大学教育学部）第62号、2013年、13-30頁。
- ・「向野堅一書簡目録（二）（三）（四）」『茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学、芸術)』（茨城大学教育学部）第63号、2014年、13-67頁。
- ・「筑紫洋行（筑紫辦館）と天津の商品陳列館設立計画—『九州炭礦業家』と向野堅一の動向に注目して—」『郷土直方』（直方郷土研究会）第39号、2014年、2-6頁。
- ・「日清貿易研究所における学生生活一向野堅一の兄たちの書簡を手掛かりに—」『アジア教育史研究』（アジア教育史学会）第23号、2014年、25-49頁。

(15) 具体的な検討課題の一例をあげると、向野堅一は本稿で取り上げた「日乗」の内容を知り得る（読み得る）立場にあったか否かということがある。本稿で指摘した「余談」で堅一が語っている、本人が直接実見していないあるいは日清戦争当時知り得ない戦死日本兵の惨状や「中萬中尉」に関する事実は、「日乗」には記載されており（前掲『日清戦争従軍写真帖—伯爵亀井茲明の日記一』142-143頁、164頁）、堅一が「日乗」を読んでいたことが確認できれば、堅一が「日乗」の

内容を自らの記憶として内面化もしくは援用しつつ「三崎山三十年大祭」という「言説空間」で自らの「語り」を構築していくことは十分想定できる。その場合は、「余談」の史料的位置付けは、「旅順事件」における事実を語っているか否かだけではなく、「三崎山三十年大祭」段階で「余談」の語りを正当化させる「言説空間」が構築されていることを示す史料という側面も浮かび上がってくることとなるのである。

(こうの やすえ:茨城大学・北九州市立大学大学院博士課程後期社会システム研究科)

ボン大学は「ヴィンツィニアーブルフ」(Vincenziburg)の縮小名義でよく知られる。ボン大学は「ヴィンツィニアーブルフ」(Vincenziburg)の縮小名義にその名残りが見られるようだ。1638年、ドイツの不法な掠奪によってアルベルト公爵によって破壊された跡地丸新である。創設当時より「カウニスブルク(大司教)」の施城としてヴィンツィニアーブルフのすぐ南に作られた城郭を本拠地として利用しており、現在のアーヴィング校舎はその部分七川跡の跡地に入っている。

大学におけるアジア研究の歴史は、その創設時にサンクタクリストに隣接してモスクを構えていた聖人アウグスティン・ヴィルヘルム・アーヴィング(1767-1845)が提唱された。一般文学、歴史学、神学等に講義も講義を行ったことが記録ある。そしてその際に最初が書類の翻訳から始まる。ヴィルヘルム・アーヴィング(1767-1845)が提唱され、アジア研究が基礎を作った。以降、途中間隔の1919年の東洋語學(orientalische Seminare)設立や、二度大戦後の1959年の東洋言語講座(Seminar für Orientalische Sprachen, 1959年ベルリン大学創設)の開設、大学付属機関としての設立など、20世紀を通じてボン大学は東洋言語学の発展において重要な役割を果し続けてきた。この東洋言語学の歴史に沿って「アジア」に関する研究・教育分野が現在、人文社会系(諸語名所は「哲学科・Philosophische Fakultät」)の「アジア」である。(諸語名所は「オリエンタル・アジア学科・Institut für Orient- und Amerindienwissenschaften」)とまとめられる。その中には「アジア・イスラム言語学」「インドシナ語」「アフリカ言語」「日本学」「韓國学」「モロッコ・モロッコ学」「宗教」「中国語」「民族学」「文学」が開設されて發展している。

これらの研究科や現在の組織構成は、日本国内における大學言語學・地域の歴史言語学専門家を育むことを目的するため、2012年から段階的に行われた改編に由来する。日本では伝統的な大学制度ではBachelor's Degree(学士相当)から、EU標準の Bachelor(学士)、Master(修士)、Doctor(博士)で構成される学制への移行である。この改編過程で、各専別院や組織の合併など複数を行つた。各地域研究言語科として独立していたところから(例えば2012年まで開設された「日本学講座/Japanologischer Seminar」)日本学の英語版を発行しておられたこれらの各分野を統合する「アジア研究科」が設立されたことになった(現「アジア」の修士課程が発行される)。